

食育事業取組報告書(紫雲寺小)

食育活動区分	(該当するものを口で囲む) 育てる・作る・食べる・返す	実施年月日	令和7年4月15日 ~ 令和7年12月18日
教科名	総合的な学習の時間	指導者	・JA北新潟農業組合 ・教諭 ・地域の稲作農家
単元名	5年生「発見！お米の可能性」		
ねらい	地域の農産物に関わる体験的な学習を通して、地域のよさや農業の価値に気づき、地域への愛着を深めながら、持続可能な地域づくりについて考える力を育てる。		
児童・生徒の活動		支援・指導上の留意点	
1 活動の見通しをもつ(4. 5月) 2 米作りに挑戦しよう「田植え」(5月) 3 米作りに挑戦しよう「調べ学習」(5・6月) 4 米作りに挑戦しよう「観察」(7月) 5 米作りに挑戦しよう「給食提供」(11月) 6 米作りに挑戦しよう「調理実習」(12月) 7 米作りに挑戦しよう「フードバンクへの寄付」(12月)		・児童の日常生活に身近な日本の農業や食料生産の課題を提示し、学習の必要性を理解させるとともに、各自の興味・関心に基づいためあてをもたせる。 ・JA北新潟職員や地域の稲作農家からの協力を得て、借用している水田で実際の田植えや稲刈りを体験させるなど、体験的な学習を行う。 ・社会科の学習と関連付け、米作りの工程や農業の役割などについて調べ学習を行う。 ・収穫した米を学校給食のごはんとして全校児童に提供し、収穫の喜びを分かち合えるようにする。また、フードバンクへの寄付も行い、社会参画への意識を高める。 ・家庭科の調理実習で鍋を使って白米を炊き、会食することで、米のおいしさや食の大切さを実感できるようにする。	
   		資料	
成果と課題	○田植えの体験や米づくりについての学習を通して、米づくりに関わる人々の苦労や工夫を実感するとともに、日本の食料生産への興味・関心を高めることができた。 △夏の猛暑や田んぼまでの移動距離などの影響により、定期的に稲の世話をしたり、生育の様子を観察したりする時間を十分に確保することが難しかった。 △田植えや稲刈りは天候の影響を受けるため、年度当初から見通しをもった作業計画を立てる必要がある。		
家庭との連携地域	・JA北新潟職員や地域の稲作農家、保護者の協力を得て学習を進めることができた。農業に携わる方々から直接話を伺う機会を通して、地域の農業と自分たちの生活との関わりを実感することができた。 ・収穫した米を自分たちだけで食べるのではなく、学校給食として提供することで、収穫の喜びを全校児童と分かち合うことができた。 ・ご飯を炊くことについて家庭でも実践してもらおう依頼し、家庭と連携しながら子どもたちの実践力を高めることにつなげた。 ・フードバンクへの寄付を通して、食を通じて社会に貢献することができることに気付かせることができた。		